

「チンパンジーが教えてくれた人間の心」

（平成 16～19 年度 特別推進研究「思考と学習の霊長類的基盤」）

所属・氏名：京都大学・霊長類研究所・教授・松沢 哲郎

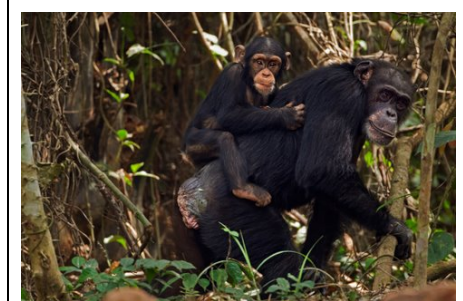
1. 研究期間中の研究成果

・**背景**：人間の体が進化の産物であるのと同様に人間の心も進化の産物である。では、どのように進化してきたのだろうか。心は、歯や骨と違って、化石に残らない。そこで人間に最も近いチンパンジーの心を調べた。両者は約 500 万年前まで、ひとつの生き物だった。同じ性質は共通祖先に由来し、違うものはそれぞれ独自に進化したと考えられる。「比較認知科学」という新しい学問領域から発想した研究である。

・**研究内容及び成果の概要**：日本の実験研究とアフリカの野外研究を平行して進めた。霊長類研究所には 1 群 14 個体のチンパンジーがいて平成 12 年に誕生した 3 組の親子がいる。子どもたちが 4 歳から 8 歳に相当する時期だ。人間でいえば学童期（6 歳から 12 歳）にあたる。この時期に、チンパンジーの子どもたちは人間のおとなよりも優れた瞬間記憶のあることがわかった。画面の数字を一瞬見ただけでどの数字がどこにあるかわかる。そうした知性が自然の暮らしの中でどう活かされているか。ギニアのボソウの 1 群 13 個体を長期にわたって継続調査した。この子どもの時期に親やおとなが道具を使う様子をじっと見てまねるようになる。「教えない教育・見習う学習」という教育法のあることがわかった。



モニター画面の 1 から 9 までの数字を一瞬で記憶する子ども



孫を背中に乗せて運ぶ野生チンパンジーのおばあさん

2. 研究期間終了後の効果・効用

・**研究期間終了後の取組及び現状**：引き続き特別推進研究(平成 20-23 年度)として採択されて、人間とチンパンジーの心の比較研究を長期的な展望で継続している。本研究はチンパンジーの子どもの時期の特性を明らかにした。人間をしのぐ優れた記憶能力をもつ一方でシンボルや言語的技術の習得は困難なことが明確になった。アフリカの自然の生息地では、群れに固有な文化的伝統を見て学ぶ。母子のきずなが長く続く。祖母の役割も見つかった。親子やなかまという社会関係のなかでこそ心が育まれることが明瞭になった。チンパンジーとの比較から人間を特徴づけるのは、他者を理解し、相手を思いやる心、遠くのものに思いをはせる想像するちからだといえる。

・**波及効果**：チンパンジーの知的な能力はいかに高いとはいえ人間を上回ることはないと考えられてきた。しかしチンパンジーの子どもが示した瞬間記憶の能力はそうした常識を覆した。人間だけが知的に優れているわけではない、人間と動物という二分法は正しくないという理解されるようになった。人間とそれ以外の知性を比較する比較認知科学の研究が、イヌや鳥類でもさかんにおこなわれるようになった。なお、研究成果は中学や高校の教科書として若い世代に読まれている。